

## VII 総括

### 1. 魚沼地方の弥生遺跡について

新潟県の中でも魚沼地方における弥生遺跡の確認年度は縄文遺跡に比して新しく、その分布状況や内容については表面採集の資料が多いため不明な所が多い。魚沼地方は魚沼丘陵をはさんで信濃川水系と信濃川の支流である魚野川水系に分けられ、地理的環境も両水系では異なっている。信濃川流域では洪積段丘や沖積段丘が顕著に発達し、特に右岸がよく発達している。弥生遺跡の立地は縄文遺跡に比して低位の沖積段丘上に立地し、標高は120m内外、信濃川からの比高約20mを測り、現在ほとんど水田になっている。分布は右岸に多く、川西町の小根岸弁天社遺跡だけ左岸に立地し、遺跡の立地が沖積段丘と極めて深い関係にある。一方魚野川流域では右岸に水無川・五十沢川・三国川などの河川あり、豊富な水量で巨大な扇状地を作り出している。左岸は段丘の発達があるものの、魚沼丘陵から流れ出る魚野川支流の小河川によって段丘が埋められて小扇状地が形成され、扇状地の規模は右岸に比して小規模である。段丘は破間川や羽根川が合流する堀之内町・小出町付近で見られるのみである。遺跡の立地は沖積地を臨む丘陵ないしは段丘上にあるもの（一水口・小栗山・飯綱山I・布場平D）、丘陵の裾部にあるもの（長表）、扇状地の扇端部にあるもの（八幡・原ノ台・大江作）がある。これらを全体的に見ると魚野川流域の弥生遺跡は左岸に多く、右岸には大江作と三国川左岸にある原ノ台があるにすぎない。左岸に古墳と同様数多く分布していることは地理的環境にもとづいた結果であるが、扇状地の扇端部付近に立地する遺跡の存在は今後の魚沼地方、特に南魚沼郡内で該期の遺跡が発見される確率が極めて高い。

### 信濃川流域の弥生文化

表1 魚沼地方の弥生遺跡

遺跡名	所在地	時期	出土品・遺構	文献
1 朴ノ木坂	津南町下船渡	後	土器・蛤刃石斧・打製石斧	津南町教委1976
2 早稲田	中里村桂字早稲田	中	土器	中川ほか 1958
3 一里塚	田沢字一里塚癸	後	土器	中里村史専門委 1985
4 城ノ古	十日町市川治字城ノ古	中	土器・太蛤刃石斧・石鏃・紡錘車	中川ほか 1958 金子ほか 1974
5 西浦	字西浦		土器・石鏃	中川ほか 1958
6 北原西	中条字北原	中・後	土器・紡錘車	中川ほか 1958
7 牛ヶ首	新宮	中	土器・扁平片刃石斧・住居跡	稲岡 1972
8 根岸弁天社	川西町小根岸		アメリカ型石鏃	稲岡 1969
9 大江作	塙沢町早川字大江作	中	土器・有孔円盤状土製品	中川ほか 1973
10 北沖	六日町小栗山字北沖	後	土器	中川 1954
11 飯綱山I	余川字飯綱山	中	土器・アメリカ型石鏃	細谷 1972
12 長表	小栗山字長表	中	土器・円盤状土製品	
13 八幡	八幡字荒神		土器	細谷 1972
14 美佐島	美佐島字野田道		土器	細谷 1972
15 原ノ台	原字原ノ台	中	土器	池田 1973
16 一水口	大和町浦佐字一水口	後	土器・植物種子	中川 1952
17 布場平D	堀之内町堀之内字布場平	中	土器	池田 1985

れ、後期初頭の尾崎式・箱清水式土器等の櫛目文土器に結びつくものと把握されている（稻岡 1972）。一方、魚野川流域では単発的に報告されているにすぎず、実態としては不明な点が多い。一水口遺跡では櫛描波状文と横走する簾状文とを組み合せた北関東・信州系の土器と縄文の地文に連弧文等の簾描沈線文を施し、口縁の端部に刻目を入れ、体部に刺突文帯をめぐらす東北の天王山式土器の影響を受けた土器が出土している。また、大江作遺跡では魚野川流域ではあまり知られていなかった信州千曲川水系に分布する中期末の栗林式土器が出土している。布場平D遺跡では壺形土器の頸部に簾描沈線による菱形文を数段重ね、胴部への変換点には2本の平行線文と山形文を施した中期後半の土器が出土している（池田 1985）。中期後半から後期前半にかけては、数少ない資料で明確に出来ないが信濃川水系の弥生文化とはかなり違いがあり、複雑な様相を呈しているといえる。今回調査した長表遺跡から出土した土器は流れ込んだもので遺構等に伴っていないが、東北南部の土器の影響を受けたものは1点もなく、信州千曲川水系に分布する中期末の栗林式土器や百瀬式土器で、少なくとも中期末には信濃川水系と同様魚野川水系（南魚沼郡内）も信州系の弥生文化の範疇に入っていたものと考えられる。

## 2. 本遺跡出土の弥生土器について

新潟県内の弥生土器については先学によって種々なされてきた。地理的環境などによってかなり複雑な様相を呈し、基本的な編年等はまだ存在していないが、上原甲子郎・磯崎正彦によって県内の土器が四様式に識別された（小林 1969）。第一様式は猫山式、第二様式は山草荷式、第三様式は砂山式、第四様式は竹ノ花式で、第一様式は縄文時代晚期の大洞A式ふうの要素を強く残しており、第二様式は東北地方南部の南御山式土器、第三様式は同じく東北地方南部の天王山式土器に、第四様式は石川県の小松式にその系統が求められるものである。

本遺跡出土の弥生土器は壺形土器・甕形土器・高杯形土器があり、天王山式土器の文様的色彩は全く見られず、信州の信濃川水系に分布している中期末の栗林式土器に極めて近似している。栗林式土器は桐原健や 笹沢浩によって型式細分されている（桐原 1963、 笹沢 1977）が、ここでは 笹沢浩の型式細分を使用することとする。

壺形土器のI類の翼状口縁を呈する一群（37～40）、II類、IV類、V類、VI類の地文が縄文で重連続弧状文に刺突文のある一群（60～65・77～22）、VII類が、甕形土器ではI類の口縁端部に櫛ないしは簾状工具で刻目をつけたもの（112・113）、II類、IV類・V類が栗林I式に比定されるものと思われる。しかし、壺形土器で頸部に突帯のつく一群はあまり類例を見ない。おそらく、北陸系の土器の影響を受けたものであろう。また、壺形土器のIII類、VI類の無文帯に刺突のあるもの（89～92）、VII類、IX類の注口付壺形土器、甕形土器のIII類、VI類それに、VII類の台付甕形土器は栗林II式に比定されるものと思われる。なお栗林I式の範疇に入れた甕形土器II類・IV類・V類の土器は千曲川流域では後期初頭まで一部が引きつがれるという（ 笹沢 1977）。VI類の168は東日本的な在地の土器と考えられる。